

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號 五 第

卷六十二第

行發日一月五年三和昭

## 論 叢

動的資本と租稅公正難 . . . . . 法學博士 神戸 正雄

臺灣の小作制度 . . . . . 法學博士 河田 嗣郎

財産生命保險 . . . . . 經濟學博士 小島昌太郎

## 時 論

支那の國民主義革命 . . . . . 文學博士 矢野 仁一

## 說 苑

助郷と農民の生活 . . . . . 經濟學士 大山敷太郎

草津宿に於ける助郷に就いて . . . . . 經濟學士 黒羽兵治郎

## 雜 錄

幣制の紊亂に基く百姓一揆 . . . . . 經濟學士 黒 正 巖

地理的認識の性質について . . . . . 經濟學士 菊田 太郎

## 地理的認識の性質について

菊田 太郎

—

認識の對象をその要素に分てば、存在と當爲、事實と價値、*Was geschieht* と *Was gilt* との、二に歸する。此の二要素は相互に獨立してゐて、存在より當爲を導き得ないと共に、また當爲より存在を生じ得ないけれども、存在は當爲實現の支體として當爲と結合することを得る。かく當爲と結合した存在は文化であり、然らざる存在は自然である。

此の文化及び自然が、それぞれ思惟の範疇である時

空に當嵌れば、文化實在及び自然實在となる。

範疇としての時間が發展の形式であり、區別を本質とするに對し、空間は共存の形式であり、統一をその特色とする。文化實在なると自然實在なるとを問はず、一實在を時間範疇に當嵌つたものとして考察する場合には、その發展變化を明にし得るのであるが、空間範疇に當嵌つたものとして見れば、諸種の屬性を統一し、且つ等しく諸種の屬性の統一たる他の實在と關聯するものとして認識される。而して前の立場に立つ認識が歴史的認識であり、後の立場に據るものが地理的認識である。地理的認識の本質は此の空間範疇に即すること以外に求め得ない。

之に反して、地理的認識の本質を土地或は地球に關係するといふ事に求める見解がある。これは一方に於て狹隘に失すると同時に他方に於て廣汎に失する。即ち地理的認識を土地又は地球に關する認識のみに局限する結果、大氣に關する認識の如きが除外されることとなる。これ狹隘に失するといふ所以である。また土

地に關する認識を總て地理的認識なりとすれば、經濟學に所謂地代の研究の如きをも包含することとなる。

これ廣汎に失するといふ所以である。前の非難は土地或は地球の意義の定め方によつて免かれることも出來やうが、後の非難は土地或は地球に關係するといふこと以外、何等か他の限定を加えなければ免かれ得ない。而してかゝる限定としてその排する所の空間的考察といふことを援用せざるを得ないであらう。

右は私が地理的認識の本質を空間的認識たることに求めんとする理由の概略である。

## 二

地理的認識の本質が空間的認識たる點に存するとなれば、謂ふ所の空間的認識は如何なる性質のものであるか。これは空間範疇に當嵌つた實在が如何なる様相を呈するかといふ疑問と、同一事に歸するのであつて、後者の側より考察するを便宜とする。

存在を時間範疇に即して認識する場合には、存在の

諸屬性は不斷に來往し、その間に同時共存の關係なく、従つて統一ある一實在を認識するを得ない。之に對して、空間は同時共存換言すれば統一の範疇であるから、空間的認識の對象たるに至つて始めて諸屬性の統一としての實在が構成されるのである。<sup>1)</sup>

次に一存在の統一的實在性を認める上は、更に他の存在のそれを認めねばならぬ。その結果、諸種の實在相互間の關係如何が重要な問題となる。而して此の關係は所謂社會的關係に似て、<sup>2)</sup> 以上の實在が單に相互に交渉するに過ぎない場合と、相互の關聯が相當緊密となつて一層大きい實在を構成してゐる場合とに分ち得るのである。

最後に同時存在は外的なることを意味する。<sup>3)</sup> 故に單に時間的に見られた存在は認識主觀に内的なるを免かれないが、空間的に考察されれば認識主觀と獨立の外的なるものとなる。さればこそかゝる存在を特に實在と稱するのである。

總括すれば 地理的認識即ち空間的認識の對象とな

つた存在は、それ自身として數多の屬性の統一體であると共に、他の統一體と何等かの關係を有し、且つ認識主觀より獨立するのである。一例として國民經濟を採れば、それは諸種の性質を併せ備へた一の統一體であり、他の國民經濟と或は交渉して國際經濟を營み、或は相關聯して世界經濟を構成し、更に我々の認識主觀より獨立に我々に對立してゐる。

これを地理的認識の作用の方面から云へば、外的なることは自明の事實として不問に附するも、實在の屬性如何と、相互の關係如何は、必ず併せ考へねばならぬのである。然るに地理的認識を空間的認識なりとする見解に於ては、實在相互の關係のみを重視し、一の實在の諸屬性の如何は顧みられないのを常とする。これ私が従ひ得ない所である。

### 三

上に述べたやうな地理的認識と、所謂地理學的認識とは如何なる關係に立つか。

- 1) Cohen, Logik d. r. Erkenntnis, 3. Aufl. S. 193, 194
- 2) 西田博士、自覺に於ける直觀と反省、253頁
- 3) Cohen, a. a. O. S. 188, 195

實在構成のための思惟範疇としての空間は、次元其他の性質を具有しながらも、單に同時共存の形式たるに止り、何等實在性を有しない。併しかゝる形式としての空間も經驗の内容と結合すれば一種の實在性を得、一の實在となる。之を經驗的空間といふ。此の經驗的空間は最早範疇としての空間の如き共存の形式ではなくて、個々の文化現象及び自然現象の出沒顯滅の舞臺である。而して地理學的認識或は地理學は此の經驗的空間を對象とするのである。之に對して單なる地理的認識はかゝる獨特の對象を有するものでなく、あらゆる事物及び事象に關する一種の認識方法たるに過ぎない。

諸多の學問の區分の標準如何、その對象であるか、將又認識方法であるか、輕忽に斷じ得ない問題であるが、假に對象を標準とする見に従ふとすれば、地理學的認識或は地理學は經驗的空間といふ獨特の對象を有するから、一個獨立の學問である。之に反して地理的認識は、文化現象なると自然現象なるとを問はず、あ

らゆる對象に適用され得て、諸多の學問に通ずる一種の認識方法たるに止まる。その爲めに、經濟現象生物現象等の地理的認識は、それぞれ經濟學生物學等の一部門となるのである。

#### 四

以上で、地理的認識が空間的認識たること、地理學的認識が經驗的空間を對象とすること、を、明にし得たと考へる。而して範疇としての空間及び經驗的空間は何れも三次元を有する。水平的關係のみならず垂直的關係をも備へて、立體である。地理的認識に於て、熱帶地方の經濟と溫帶地方の經濟との交渉といふやうな平面的關係以外、高山の生活と低原の生活との差異の如き垂直的關係も問題となり得、また地理學的對象も、地表に限定せられないで、天空遙に輝く星晨までも包含する。けれども實際上我々の生活と最も密接なる關係を有するのは地表に外ならないから、地理的認識に於てまた地理學的認識に於て、空間の三次元

性を固守する見解と地表を特に重んずる見解とは、研究の實際に對する影響に於ては左迄の相違を見ないであらう。

ニュートンの物理學がカントの基礎付けを待たずして成立したことは、學問發達の歴史上顯著な事實である。一の研究は必ずしもその研究自體の性質の吟味を必要としないであらう。特に、遠い起源を有するに拘らず未だ極めて幼稚な地理的研究或は地理學は、その性質如何の考察よりも、それ自身の發達を要求することが、一層切實であらう。しかも他面地理的或は地理學的研究に入るに當つては、その性質の大略の考察を欠くことを得ない。これ未熟な管見を記して、大方の示教を請ふ所以である。

5) 恒藤學士、文化現象の地理的認識 (田島博士還曆紀念論文集、145、138頁)